国

問

国　語

平成二十七年度

注　意

(1) 「解答はじめ」というまで開いてはいけない。

(2) 問題は一冊(本文九ページ、下書用紙は一枚)、解答用紙は三枚である。下書用紙は問題冊子の中にはさみこんであるので引き抜いて使ってよい。

(3) 全部の解答用紙に受験番号を書くこと。受験番号は次の要領で明確に記入すること。

(例)　受験番号 50001 番の場合

5	0	0	0	1

(4) 解答は解答用紙の所定の位置に書くこと。他の所に書いても無効である。字数などの指示がある場合は、その指示に従って書くこと。解答文はたて書きとする。

(5) 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使ってはいけない。

(6) 書き損じても、かわりの用紙は交付しない。

(7) 試験終了後、問題冊子と下書用紙は持ち帰ること。

問題一　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

一般に、言語は意と音があって初めて言語となる。正しくは、言語活動によって初めて音と意が分節され、語音と語意が知覚される。語の誕生は、意と音の誕生に等しい。ソシュール(注)に従って、意をシニフィエ(signifié)に、音をシニフィアン(signifiant)に、そして語をシーニュ(signe)に置き換えてもよい。その場合、ソシュールがsignifier(意味する)という動詞の活用(過去分詞と現在分詞)によって表そうとした考えが、意と音と語に導入される。すなわち、あらかじめシニフィエとシニフィアンがあって、その二つが結びつくということではなく、signifierという動作によってそれらが分節されて現れるのである。その意味では、小林英夫が(注)、意や音ではなく、シニフィエを「所記」、シニフィアンを「能記」と訳したのは、ゲンゴになるべく沿おうとしたものだと言える。だが、そこには決定的な誤りがあった。signifierは「記」ではない。

〝記〟とは、口頭ではなく書記にかかわる動詞である。たとえ書き記さないにしても、何らかの手段でとどめる、定着させる、保存する、という方向は変わらない。そこに〝意味する〟という語義はない。おそらく小林は、シーニュの訳語が「記号」であることから、「能記」や「所記」という訳語を定めたものであろうが、もし漢語で訳すのであれば、〝能示〟や〝所示〟のように、べつの動詞を用いるべきであった。

そもそもシーニュを「記号」と訳すことに陥穽がある。日本語で記号と言えば、ほとんどの場合、外形的に固定された、もしくは一定の形態をもったものとしてある。音声記号とわざわざ言わなければ、多くの人は、書かれた、描かれた、刻まれた――すなわちしるされたものを記号としてソウキするであろう。『明六雑誌』にケイサイされた清水卯三郎「平仮名ノ説」(一八七四)には、こうあった。

蓋夫文字文章ハ、声音ノ記号、言語ノ形状ニシテ、古今ヲ観、彼此ヲ通シ、約諾ヲ記シ、藝術ヲ弘ムル日用備忘ノ一大器ナリ

しかし、ソシュールにおけるシーニュはそのような記号ではない。「シーニュは、コトバの外にある意味や概念を表現する外的

標識ではない。シーニュはそれ自体が意味であり表現なのである」（丸山圭三郎『ソシュールの思想』）。意味することそのものが何らかのかたちとして知覚されたものがシーニュであり、記されて固定されるようなものではない。音声言語も手話言語も、シーニュは次々に現れ、消えていく。意も音（動作や表情）も、時間軸に沿って知覚され、上書きされる。

シーニュは記号ではない。では、文字は記号なのか。

文字は、たんなる記号ではない。文字の誕生に即して言えば、音声言語との対応関係が成立した時点で、それは一般の記号とは異なる性質を獲得する。その瞬間、文字は発見される。記号は発明されるものであるかもしれないが、文字は発見されるものだ。あらかじめ存在していた記号が、文字として見いだされ、編成され、そしてD[ゾウショク]する。音声言語と対応しうるということは、要素としてのみ対応するのではなく、秩序として、体系として対応するということだ。文字の秩序は、それ自体が一つの言語となる。文字言語の誕生である。

文字言語は、記号が音声言語の作用を受けて、言語化したものである。したがって、言語としては同じように機能する。大きな違いは、言うまでもないことながら、文字は書き記されるということだ。つまりその意味で、文字には記号としての性質が受け継がれている。音声言語には、〝示す〟（意味する）機能しかないが、文字言語にはそれに加えて〝記す〟機能がある。「所記」と「能記」は、文字についてならば、妥当な訳だったかもしれない。文字言語は、機能面から言えば書記言語である。

言語に書記がともなったことは、言語のありかたそのものに大きな変化をもたらした。移ろいやすいはずのシーニュに、固定したかたちが与えられた。もちろん、口頭で発せられたことばを記憶にとどめることは、古くから行われていた。無文字社会で口承の技術が発達していることは推測しやすいし、近代以降の実例もある。しかし、文字に記すという事態は、さらに拡大された言語世界を開くこととなった。

いったん成立した書記言語は、口頭言語の範囲を超えて伝播（でんぱ）する。そして口頭言語との相互作用によって、そのすがたを変化させ、また、口頭言語のありかたにも何らかの――時には大きな――作用を与える。口頭言語は変化しやすいものであるが、書記言語はしばしば変化を嫌い、保守的な傾向を見せ、言語規範の形成に寄与しようとする。書記言語は、口頭言語との間にE[キンチョウ

関係をもつものとなる。そしてこうした性質は、すべてその〝記す〟という機能によってもたらされる。

――齋藤希史『漢字世界の地平』

（注）ソシュール　フェルディナン・ド・ソシュール　一八五七～一九一三。スイスの言語学者。

（注）小林英夫　日本の言語学者。ソシュールの講義録を『言語学原論』として一九二八年に翻訳。

問い一　傍線A・B・……Eのカタカナで書かれた語句を漢字で書きなさい。

問い二　傍線ア「分節され」の「分節する」、傍線イ「陥穽」の意味を答えなさい。

問い三　傍線一「文字は記号なのか。」とあるが、著者は文字と記号の関係についてどう考えているのか記しなさい（四〇字以内）。

問い四　著者は音声言語（口頭言語）と文字言語（書記言語）との関係をどうとらえているのか、問題文全体をふまえて答えなさい（一〇〇字以内）。

問題二　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

余輩私に何を以て世の読書あり、学識ある青年が、此の如く身を誤るもの多きやを考察するに、蓋し最初学校を出づるに当りて、毅然として独立独行するの気慨に乏しきに因るなり。貧困に甘んじ妄りに人の下風に立たざるの精神に欠くるに因るなり。然り而して最大原因たるものは彼れが天性の美なることなるが如し。何を以て天性の美なるは青年をして其身を誤らしむる乎。余輩請ふ今之を述べん。夫れ天性美なるものは、読書に巧みにして文辞に長ぜり。是を以て学校にありては教師に愛せられ、校友に重んぜられ、嘗て修学の苦あるを知らざるなり、是れ亦た可なり。其学校を出でて世務に当らんとするや、教員校長等の推薦する、必ず此人を以て第一となす。是を以て此人や世間風波の困難なるを知らざるなり。抑も世間風波の困難なることを知らざるものは、一鍛錬せざる鉄の如きものなり、其天性如何に美なりと雖も堅緻なる所なし。然り而して此風波や青年の勇気勃々たる時に当りて経過せざるべからざるものなり。然るに彼の青年は其天性美なるの故を以て、此必要なる煉磨を経ずして、一飛して厚給を受け、仕送りの学資未だ用ひ尽さざるに、早く錦衣玉食の情味を解するに至る。天下之より不幸なるはなきなり。嗚呼此人や之より如何なる生涯を為すぞや。最初には左までにあらずとも、数日にして其地位の安固と、給料の源泉とは、全く頭上一人の意見に存することを解するに至らん。数月にして其栄達と危険とは、其意見を奉じて、勤勉するとせざるとに存することを解するに至らん。数年にして其人の意を迎へて鞅掌(注)従事するの最も安全にして最も利益ある方法たることを解するに至らん。嗚呼是れ此人の為に止むを得ざるの進路にして、而して又た此人をして天然の勇気を沮喪せしむるの進路なり。此時に於ては、此人定めし妻あるべし、定めし児あるべし、而して驕奢の美味、既に其心身に浸染したれば、又其地位を下だして独立独行の新舞台に出づる能はず、勢ひ上者の命是れ奉じて、役々是れ務めざるべからず、二人生固有の勇気を消耗せざらんと欲すと雖も得んや。況んや、教育の進み英才の出づるは、年毎に新なれば、此人の漸く沮喪するに当りて茲に新鮮なる一青年を出し、之と競争せしめ、優勝劣敗の理に因りて漸く排斥の運に向ふは止むを得ざるの命運なるをや。白楽天の所謂、百年苦楽因他人とは特に婦人の身の事にあらず、三今の青年俊才の生涯も亦た然るものあるなり。

――田口卯吉「青年独立の困難」

（注）　鞅掌　休む暇がないほど忙しく働くこと。

問い一　傍線一「鍛錬せざる鉄」という表現は何をたとえたものなのか、問題文全体の内容をふまえて説明しなさい（三〇字以内）。

問い二　傍線二「人生固有の勇気を消耗せざらんと欲すと雖も得んや。」を、主語を補って現代語に訳しなさい。

問い三　傍線三「今の青年俊才の生涯」を筆者はどう考えているか、問題文全体の内容をふまえて説明しなさい（一〇〇字以内）。

問題三　次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

よく、学問は疑いから始まるといいます。だから万事疑うことが重要だと。その通りです。決して間違っていません。だが正しいことが間違って受け取られて大違いのもとになることもある。学問的発見の創造現場に立ってみると、疑いの前にというか疑いの底に信ずるという行為があって、その信の念が「疑い」を創造に生かしている。そういう仕組みになっているので、その面の理解を欠いて言葉だけを受け取ると、正しくはあっても肝心の創造、ささやかながらも自分でものを見、一個の自由な人間として何かを創ってゆくには役立たぬ空語になります。

新しい学説の生誕という、大状況での学問的事件の場合でも、およそ創造の現場に立てば同じで、それについても後に申し上げるつもりですけれども、大学者の大学問創造に関する大議論は別として、お互い「本を読む」という当面の実際問題としても、いったい、本は、最初から疑いの眼で接して読めるんでしょうか。試しにちょっと、――仮説的に私を信じて――考えてみて下さい。「学問は疑いから生れる」という真理をう呑みにして、役立たぬ形でもたれかかっていたなあ、と気づかれるかも知れませんよ。

古典は一読明快ではない。深く、踏みこんで読まねばと、さきほど申し上げました。古典の真髄、古典の古典たるゆえんは、踏みこんで、深読みして――本文との格闘をくりかえして――初めてわかる。それは御了解いただいたと思いますが、しかし、信じてかからなきゃ踏みこめないじゃないですか。「適当に」しか読めない。疑い深く白眼視しながら踏みこんで本文と格闘するなんてことはできない。それ自体矛盾しています。いわんや、分らぬところを二度三度、時間をかけて根掘り葉掘り深読みの労を払うなど、馬鹿馬鹿しくってできるわけないですね。何か期して待つところがなきゃ。信ずるところがあって初めて、読み深めの労苦が払える。

も少し、さしあたって手ぶらで考えられるかぎりで問題を煮つめておきましょう。いま、ちょっと見たように、信ずることがなければ読み深めの労は出てこないが、それよりもまず、労を払って解くべき問題・事実そのもの――解読すべき本文の字句――が、信の念がなければハッキリした形で目に映ってこない。

たとえばAさんの本を読んでいて、おかしいなと思うとき――あるいは思うところは、誰にもいっぱい出てくると思いますよ。ここでAさんがいっていること――事実あるいは解釈――は、私の了解しているところと違っている、おかしいなとか、ここにはこう書いてあるけれど、たしか他のところでは別のことをいっていたと思うがなあとか、あるいは、つじつまの合わんこと、あるいは関係のないことが同じこのパラグラフのなかにあるとか。その他、多少読みつけてくると、段落と段落あるいは章と章との関係ですね、さらには全体の編別構成。そのかかり結び――と私は名づけています。コンテクストとかテクスチュアといってもいいでしょう――がハッキリつかめないとか。要するに文章解読法の鍵になる(かも知れん)いくつかの箇所ですね、具体的な。

文章についてそういう事実(と思われるもの)の発見があり、そこに何故という疑問がおこる。そして、その疑問を解くための探索が始まる。それはそうなんですけれども、その「事実に対する疑い」が、現実に、ある具体的な事実に対するはっきりとした形の「疑い」として読み手に提起され、その「疑い」を解明するための労苦を要する行為に結実してくるためには、その(疑いの)底に信ずるという情念・信の念が働いていなければならないでしょう。一つには、ここにはたしかに私にこう読めることが書いてあるけれど、それはどうしても変だという、自分の読みに対する信の念が。そしていま一つ。Aさんほどの人が出たらめを書くはずがないというかたちでの、著者に対する、これまた信の念が。

この二つの面での信念に支えられて初めて、疑問が、ある事についてのハッキリした形の疑問として起り、それを解くための苦渋にみちた探索が始まり、また持続するわけです。事実を執念深く確かめてゆく操作のなかで、この二つの面での信念も、それぞれに確かめ直されて中身も変ってくるわけですけれども、それにしても、あらかじめ、端緒において、漠たる形ではあれ、行為へと人をうながさずにおかぬ強烈な信念がなければ、読み深めの行為どころか、そもそも解明すべき事実なるもの――ここにこう書いてあるがそれは変だというそれですね、さしあたって――すら、ハッキリした形では浮かんできません。何となく変だという感じで終ってしまう。

漠然たる疑いは、そのままでは解きようがない。問題が、解明を要する問題としてハッキリとした形で読み手に提起されてくるには、そもそもまず、端緒において、この両面でのそれぞれに深い信念があることを前提にしています。

自分の読み――あるいは読むときの自分の感じ――に対する信念だけあって、はずという、著者らしい著者としてのA氏に対する信の心が無ければ、本文の字句に対する具体的な疑問がかりに起ったとしても、その疑問は、ミスプリか思いちがいだろう、といったかたちで、本文に勝手な改訂を加えて安直に読むことで、解消してしまうでしょう。熟読・熟考によって解明すべき箇所・具体的な事実そのものが、消えてしまう。自負――じつは他者一般に対する浅信――からくる本文の読みとばし・粗読です。

もっと粗雑に、一読明快に目に映るかぎりで読みとばしてなんらの疑問も生じない無神経な人も多いですけれども、それでは本を読んだことにはなりませんね。本文の一字一句に神経をくばって精読し、おかしいとおもわれる箇所のいくつかを発見してその鍵を解こうとするのは、もともと、「はず」というA氏あるいは「A氏ほどの人」への、さらにいえば、A氏もそれに属しているはずの著者らしい著者というものに対する信念が心に働いているからです。駄本ばかり読んでいると、こういうくせが身についてしまいます。本とは「適当に」読み流すべきもの。

他方でしかし、これとは反対に、著者への信だけあって、自分の読みに対する信念がおよそ無ければ、あるいは、本を信じて自分を抛棄してしまっては、これまた精読はできない。本文を隈なく精読し読み深める労を払って自分の見たところ、自分の疑惑を確かめ、隠された内実に到達してその本を自分の古典として獲得する創造的読書への道は、ここでもまた、閉ざされてしまいます。「適当に」しか本が読めない。

疑問が出ないというよりも、そもそも、それを疑問として執拗に探索をしてゆくべき事実そのものの発見と確認ですね、ここにはこう書かれている(がそれはどういうわけだろう)という事実が、はっきりとした形で自分の目に映り、確認されてこない。

愛読者といわれる人のなかには、むしろファンというべきでしょうが、A氏一辺倒で、A氏のものといえば――A氏のものだけは――我を忘れて読みふける人もありますけれども、こういう読み、著者にもたれかかって己れを捨てた耽読は、深読・精読に似て然に非ず。盲信からくるこれまた一種の読み飛ばし行為つまり本質的には粗雑な読みであって、一字一句本文を精読し、謎を含む(と思われる)ところを見出してその謎を解く労苦に満ちた「賭け」を重ねてA氏の真髄にいたる道ではありません。

深いところで著者を信じることは必要ですが、自分を捨てて著者にもたれかかっちゃいけない。その時その時の自分の読みをと

にもかくにも信じてそこに自分を賭ける。という行為（のくりかえし）がなければ、A氏の本が名著であるゆえんをこの眼で確認し、自分の古典として獲得することは、何回くりかえし読んでも不可能です。

こういう、読む人自身への信と忠誠を欠いた「盲信からくる粗読」は、その意味で非生産的ですが、それだけじゃない。愛読者としての著者への信の面でみても、こういう読書態度は、A氏を、深いところで信ずるというよりも、むしろ、著者らしい著者、信を寄せるに足る人間の一人として見ていないことを、つまるところ本当にはA氏その人に対する人間的信頼が欠如していることを意味する、といっていい。まともにぶつかってゆくことに危惧を感じる。曖昧模糊としたままに置くことによって保たれねばならぬような「信頼」関係。それは信頼関係とはいえますまい。

以上二つの面での信念に支えられて念入りに、注意深く事実を見るという行為があって初めて、「疑い」が現実に学問的探求の母となるのであって、その裏打ちがなければ、疑いは、漠然とした、消極的で不毛なフィーリングに終って、本文解読の積極的な活動を生む源にはなってきません。

――内田義彦「「読むこと」と「聴くこと」と」

問い　右の文章を要約しなさい（二〇〇字以内）。